

## 解説——大西中将と私

鶴田浩二

私は、戦時中、一度だけだが、生前の大西中将をお見かけしたことがある。昭和20年、当時、私は学徒兵として、千葉の館山航空隊で一式陸攻<sup>1</sup>の飛行訓練を受けていた。そこへある日、大西中将が視察かなにかでお見えになったのである。とはいえ、相手は将官、こちらは一学徒兵、中将の警咳に接したわけではもちろんない。そのときの印象も、いまは茫莫としてしまっている。

大西中将をはじめて身近かに感じたのは、この本を原作とした映画「ああ決戦航空隊」（昭和49年）に、大西中将役で主演することになった時である。役づくりのために、この本のみならず、他の伝記も読んだし、まだご存命だった大西未亡人にもお会いした。また、この本の著者である草柳氏と一緒に鶴見の総持寺にあるお墓に詣でたりもした。その結果、大西瀧治郎という軍人の生き方が自分なりに理解でき、また納得できもしたように思う。

その一つは、大西中将もまた歴史の被害者ではなかったか、ということである。大西中将は「特攻生みの親」として、加害者の位置に置かれてきた。しかし、特攻を出さざるをえなかったのではないかという点は、省みられることなく、過されてきたのではないか。

私が思いたいのは、大西中将は日本人としての誇りをきっちり保持したかったのではないか、ということである。

戦いの敗色が濃厚となるにつれ、大西中将が「ほかに戦うてだてはないのか」「民族の誇りに賭けて戦う方法は残っていないのか」と必死で模索したのは、軍人としての義務であり、当然のことであろう。

そのような大西中将の位置を考えてみると、軍人として、さぞ、無念だったろうと思われることが一つある。戦いにおいては、文字通り刀折れ矢つきではじめて降伏するものであるが、敗戦当時の日本には、外地での戦闘や国内の空襲禍をよそに安逸を貪っている人々があつたことは事実であろう。このことは、私自身も戦後になって知ったことだが、日本が滅びるかどうかの瀬戸際に立たされても、ひたすら保身を図っていたグループがあつたのだ。当時、一学徒兵であつた私に雲の上のこと（陸海軍部上層部）がわかろうはずがないが、大西中将はどうであつたのか。民族の誇りを守るために特攻を出してしまった人間として、そのような上層部の存在に痛恨きわまりない心情を抱き、胸を嘔む思いをしていたのではないだろうか。

全くの私見であるが、どの民族国家も、歴史のある時期において、飛躍のための「陣痛」を感じることはないだろうか。宿命的に資源小国である日本にも、何回か「陣痛」期があつたように思えてならない。中世期における八幡船の活躍、豊臣秀吉の朝鮮侵出、日清・日露の両戦役、それから満州事変に始まる今度の戦争も、日本にとっては「陣痛」の時期と見ることはできないか。そして、不幸なことに、日本は何回目かの「陣痛」

<sup>1</sup> 乗員7名（主/副操縦手、主/副偵察手、主/副通信手、搭乗整備員）Wikiより

である太平洋戦争で敗れたのである。

話は少し変わるが、数年前、私はある大学で講演をしたことがある。その時、もし戦いが起ったらどうするか、学生に聞いてみた。すると、九割以上の学生が山の中に逃げるという。しかし、戦いが始まれば、その山も川もなくなるんだと問い詰めると、外国（たとえばアメリカ）に逃げるという。だが、アメリカが、自分の血を流してまで日本を侵略から救おうとするだろうか。学生諸君は、問題を現実的に考えようとしていないのではないか。私は、この時、戦後 30 年経って、大西中将の志が伝わりにくくなった日本を感じざるをえなかった。

日本の青年たちが、国家のことを考えようとしなくなったのは、アメリカの占領政策とそれに続く教育の在り方に問題があるのかもしれない。その原因についてはさまざまな議論があるのだろうが、戦後の日本には大西中将が最も大切にしていた「民族の誇り」が失われたことは事実であろう。現在の日本を見たら、大西中将は諦めて言葉もないにちがいない、と想像できる。もっとも、仮りに日本が太平洋戦争に勝っても、その時点で、割腹されたに違いないと、私は確信している。

自分の国は自分で守れ、と理屈を言うつもりは全くない。だが、自分の国が可愛くないのか、可愛ければどうするんだ、という問いかけはいつも私の胸にある。これは、右翼とか左翼といった次元とは別のことである。あえていえばド真ん中の思想、とっていい。

特攻のようなことは二度と繰り返されてはならないし、国と国との揉めごとは外交によって解決されなければならないことはいうまでもない。

ただ、そのことと大西中将が抱懐していた思想を正しく後世に伝えたいということとは、別の次元の話である。特攻が良いか、悪いかを論ずるのではなく、国の危難を救うために私たちはそれに足る精神を持ちあわせているのか、を論じたいのである。いや、もっと単純に、国を救うことが悪いことでありえようか、そんな質問を発し続けることが必要な社会なのである。

大西中将という人の思想を、私は、いま、以上のような位相でとらえている。映画の中でも、それを演じたつもりである。しかし、日本の現実は大西中将の思想が伝わりにくくなりつつあるといえるだろう。その意味でも、この本が続まれ続けることを願ってやまないのである。

(俳優)